

能『羽衣』と世界の白鳥伝説、天女はどこへ帰っていったか  
The Noh *Robe of Feathers* and Swan Legends of the World

竹村 茂  
TAKEMURA Shigeru

The noh *Robe of Feathers* appears to be based on the Swan legend. The wish for eternal youth and no death explains the swan legend. Moreover, the motif of undressing and the bathing is related to the sloughing off of snake skin which represents regeneration. The point of the *Robe of Feathers* is that a man who obtains an angel's robe of feathers and then returns the robe of feathers to the angel at once is philosophical. The pull of the tide seen on the beach synchronizes with the lack of the moon and symbolizes an eternal life. The angel who has an eternal life returns to the moon.

## 1. 「月と不死」

能『羽衣』のテキスト<sup>1</sup>を今回改めて読んでみた。テキストにした『日本古典文学全集 33 謡曲集一』は、写真が豊富で、詳しい解説がついている。テキストを読むときに、能が演じられるときの雰囲気をつかむために、平行して地謡のテープを聞いた。

この話は羽衣伝説に基づいているが、羽衣伝説にはいろいろなパターンがあるらしい。今、*Encarta*百科事典<sup>2</sup>で調べてみると

**羽衣伝説** 天人女房譚(たん)ともいわれる一群の伝説、昔話。天女が地上へおりてきて水浴をしていると、人間の男が天女のぬいだ羽衣をぬすみ、かえれなくなった天女が男と結婚する話である。

古く「近江(おうみ)国風土記」では、8人の天女が白鳥となっておりてきて、か

えれなくなった1人が男と結婚して男女各2人の子を生むが、衣をみつけて天にのぼる。「丹後国風土記」も8人の天女が水浴し、老夫婦が衣をかくす。かくされて養子となった天女は酒をかもし、その酒で富をえた老夫婦は天女をおいだす。

( *Encarta* は、執筆者不明。 )

[地謡] <クセ>春霞、たなびきにけり久方の、月の桂の花や咲く

『謡曲集一』の注(p.357)では『「春霞たなびきにけり久方の月の桂も花や咲くらむ」(後撰集 春 上 紀貫之)からとった』となっているが、なぜ月に「桂」の木なのであろうか？

石田英一郎『桃太郎の母 - ある文化史的研究』<sup>3</sup> に、「能『羽衣』と世界の白鳥伝説」に関して「月と不死 - 沖縄研究の世界的関連性に寄せて - 」という論文がある。その中で石田英一郎は

月世界に常緑不死の桂の樹の存在を説く中国古代の信仰(p.13)

と指摘してる。『世界大百科事典』<sup>4</sup> によると

**桂** 中国では、ニッケイ(肉桂)あるいはモクセイ(木犀)、また月にあると考えられた木。日本のカツラやゲッケイジュとは別物。一方、《淮南子(えなんじ)》にさかのぼって、月の中に桂の木と蟾蜍(ひきがえる)がいるという民話が普遍化し、(中略)桂蟾(けいせん)、桂宮(けいきゆう)といった熟語は月の文学表現として頻用され、桂月、桂樹などの名号、桂園一枝、折桂などの言葉もこれと関係する。(梅原 郁)

**モクセイ(木犀)** 中国原産のモクセイ科の常緑小高木。庭園木として秋に開花し芳香を放つ。(浜谷 稔夫)

前出「月と不死」(p.2)の扉で、石田英一郎は「欠けては満ち、死してはまたよみがえる月の姿こそ、原初の人類の不死へのあこがれと固く結びついたのであった。」と述べている。そして、月は浜辺と結びつく。前出「月と不死」(p.18)にシェクスピアの『ヘンリー4世』が引用されている。

...the fortune of us that are the moon's men doth ebb and flow like the sea

...

...お月さんの家来だけに、こちらの懐具合は、海と同様に、月の加減で満潮になったり、干潮になったりするからね... (逍遙訳)

月の満ち欠けと、潮の満ち引きが関連づけは、古代の人も持っていたであろう。では、そこで月から来た天女はなぜ羽衣を脱ぐのであろうか？

## 2. 脱皮と水浴

古代の信仰で、月と共に不死の象徴であったのは蛇である。

多くの民族の信仰によれば、蛇、<sup>とかけ</sup> <sup>かに</sup> 蜥蜴、蟹などのように、脱皮によって絶えず死と復活との過程を反復していると見られた種類の動物であった。「月と不死」(p.29)

天女が羽衣を脱ぐのは「脱皮」をあらわす。そして「水浴」は再生のための儀式である。

「月と不死」(p.5)では、万葉仮名の「変若水」を「をちみず」と訓じる例をあげて、古代日本に水を浴びることによって若返るという考え方のあったことを証している。また、世界各地の民話を検討して、水を浴びることによって若返るとい考え方が広く分布していることを照明している。

『世界大百科事典』で「若水」を引くと、

**若水** 元日の朝、最初にくむ水。元日の行事の使い水で、口をすすいで身を清めたり、神への供物や家族の食物の煮たきに用いたりする。若水耀みは 若水迎え ともいわれ、儀礼的な色彩が濃く、若水手拭で鉢巻したり、井戸に蛭や洗米を供え、祝いの唱え言をしてくむ土地が多かった。(中略)かつて琉球の首里王府では、沖縄島北端の村からくんできた水で、元日の朝、王が お水撫で(ウビーナディ) をした。 お水撫で は、神聖な水を中指で額に3回つける作法で、若返りの水を浴び

た効果があるといわれた。新年にあたり生命の更新をはかる儀礼で、民間では主婦が若水でお水撫でをする習慣があった。(小島 瓊礼)

若水信仰には、水を浴びることによって若返るという信仰の残滓がみてとれる。「水浴する天女の羽衣をとる」ということは、若返りたいという人間の欲望の表れであろう。

「月から降りてきた天女が若返りのために羽衣を脱いで水浴する、若返りたい人間がその天女の羽衣をとる」というのが、この話の骨格であろう。

### 3. 能『羽衣』の哲学性

男が羽衣をとった後のいろいろな展開は、語られる地域の風土が反映しているのであろう。

羽衣伝説の一般的パターンでは、「男は羽衣を帰さず、天女は仕方なく男の妻になる」と、後で挫折するにしても男の欲望にそった都合のよい夢物語にされているが、本来は他の不老不死の説話と同じく最初から挫折するものであろう。

能『羽衣』では、

「衣なくてはかなふまじ。さりとはまづ返し給へ」と天女がいうと、白竜は、「いやこの衣を返しな、舞曲をなさでそのままに、天にや上がり給ふべき」と疑う。このとき、「いや疑いは人間にあり、天に偽りなきものを」と天女が答える。これを聞いて白<sup>はくりょう</sup>龍は羽衣を返す。

羽衣伝説の他のバリエーションでは、男は強引に天女を妻にしてしまうのだから、能『羽衣』のこの展開は哲学的であるとさえ言える。

日本の一般的な羽衣伝説を見てみると

羽衣伝説は各地に各様の形で伝えられているが、それらは天人がこの世の男の妻となる点が一番の要素となっている。沖縄に行われている「銘刈子」<sup>めかるしい</sup>の伝説は、天女が羽衣を隠されたために地上にとどまって人間の妻となり、やがて子が生まれる。

何年かたってその子の無邪気な言葉によって天女は羽衣のありかを知り、天へ帰っていく。<sup>5</sup>

*Encarta*の羽衣伝説の続きの部分引用すると、

**羽衣伝説** 類話は各地に多く、結婚した天女は、(1)天女だけ天にもどる、(2)子が衣のかくし場所をおしえ、子をつれて天にもどる、(3)天女と子のいる天へ夫は夕顔の蔓(つる)をつたってのぼり、天女の父親からだされた難題にこたえられずに地上へもどされる、(4)夫は天上で天女とわかれるが、1年に1回、七夕にあうことを約束する、などの型がある。

#### 4. 天女はどこへ帰っていったのか

『世界大百科事典』で「みほ」と入れて検索をしてみると、三保の松原の他、茨城県美浦村(霞ヶ浦の南岸)、島根県美保湾に面する美保関町・美保神社などが出てくる。漢字は違うが、地形を考えるとみな同じ語源かもしれない。『地名の語源』<sup>6</sup>を調べてみると、

ミホ 三穂で先端が三つに分かれているの意。また御穂(穂のように突き出ている)御(ミ)秀(ホ)説、ミオ(漣、水尾)説などがある。

となっている。では「ミオ」を調べると『漣(ミオ) 水尾のことで、また「水路」や「淀』』となっているから、地形を考える「ミオ(漣、水尾)説」が妥当であろう。「漣」は『世界大百科事典』によれば「三角州などの遠浅で泥質の干潟の表面にえぐられた河川延長上の浅い水路。屈曲・分岐することが多い。」

遠浅で美しい海岸に「ミホ」の名が多いのであろう。

では、天女はどこへ帰っていったのか？



《三保松原図》（部分）

☆颯川美術館

さるほどに、時移って、天の羽衣、浦風にたなびきたなびく、三保の松原、浮島が雲の、愛鷹山や富士の高嶺、かすかになりて、天つ御空の、霞にまぎれて、失せにけり。

天女が天に帰って行くのは「白鳥伝説」に基づいているのであろう。日本の白鳥伝説と言えば「倭建(やまとたける)命の靈魂が化して白鳥になった」が有名であるが、本来の白鳥伝説は女性である。Encartaの羽衣伝説の続きの部分引用すると、

**羽衣伝説** 「近江国風土記」の天女は白鳥の姿になるが、アジアの中・南部やヨーロッパに多い白鳥処女伝説も、羽衣伝説と同系である。若者が水浴中の娘のぬいだ白鳥の羽をうばって結婚を強要し、妻は数年後にその羽をみつけて故郷にかえる。夫はかえり先をつげられ、困難な旅をへて妻に再会する。

『世界大百科事典』によると

**白鳥処女** ほとんど全世界に分布する昔話のモチーフで、日本では 天人女房がこれにあたる。若者が水浴中の娘が脱いでおいた白鳥の衣(日本では羽衣)を奪い、妻になることを強要する。数年後妻は衣を見つけて故郷へ去るが、そのとき、自分の帰る先を言い置く。夫は妻を求めて困難な旅に出、彼女を発見する。このモチーフは、古代インドの《シャタパタ・ブラーフマナ》や《リグ・ベダ》にみられるところから、インド起源と考えられている。西欧へはヘレニズムの時代に伝播し、主として北欧・中欧で他の諸モチーフと結合して 多様な展開をしたものと考えられる。ヨーロッパでは、白鳥の姿をした娘が、衣を脱ぐと人間になるのに対し、中国や日本をはじめ東アジアでは、天人が飛来して羽衣を脱ぐとされている。またヨーロッパでは妻の行き先が遠い魔の山であるに対し、東アジアでは天とされる。(小沢 俊夫)

これは「異界」をどこに考えるかの問題であろう。水平方向に考えて「海の彼方」「西方浄土」「魔の山」と考えるか、垂直方向に考えて「天国」「地獄」と考えるか。

能『羽衣』では、「しかるに月宮殿の有様、玉斧の修理とこしなえにして」とあるように、天女の帰るところは「月」である。その月は、浜辺で見える潮の満ち引きと連動して、満ち欠けを永遠に繰り返す永遠の生命を持った「月」である。人間の永遠のあこがれが具象化されているのであろうか。

- 
- <sup>1</sup> 『日本古典文学全集 33 謡曲集一』小学館 1973 以下『謡曲集一』 テキストは観世流の『野田本』を底本にしている。この本では、羽衣は「世阿弥作という確証はないが、『能本作者註文』『いろは作者註文』『歌謡作者考』『自家伝抄』『二百拾番謡目録』等すべて世阿弥の作とする。
  - <sup>2</sup> Microsoft(R) Encarta(R) Encyclopedia 99. (c) 1993-1998 Microsoft Corporation.
  - <sup>3</sup> 石田英一郎『桃太郎の母 - ある文化史的研究』講談社、1966年、以下『桃太郎の母』の略称で引用。
  - <sup>4</sup> 『世界大百科事典・年鑑・便覧・地図』(第2版) 1998年10月(株)日立デジタル平凡社。
  - <sup>5</sup> 『研究資料日本古典文学 第十巻 劇文学』明治書院 昭和58年 「羽衣」(p.22~30) 執筆は三村昌義。この本では「羽衣とは、神聖な靈魂の宿っている衣と考えられ、それを身につけると神格を得る、換言すれば人格が転換するものとされていた。」と解釈している。また、「羽衣」は世阿弥作という説をはっきりと否定している。
  - <sup>6</sup> 鏡味完二・鏡味明克『地名の語源』角川書店、昭和52年10月31日。